

# 2014年度 事業報告書

灯籠委員会 委員長  
難波 俊輔

## 1. 事業内容

- (1) 会員拡大
- (2) 京都会議
- (3) 6月担当例会「近現代史から読み解く日本の誇り」
- (4) 柿川灯籠流し事前清掃
- (5) 第31回柿川灯籠流し～未来へ繋ぐ、慰霊の灯～
- (6) 忘年会「響友～未来を開く長岡 JC 魂～」
- (7) 「8月1日」の在り方の検討

## 2. 所感

本年度、灯籠委員会では戦後70年の節目を目前に控え、昨年から引き継がせていただいた「まちが一体となったかたち」の模索と構築に向けて、繋ぎを意識した取り組みを展開させていただきました。今現在、長岡各地で様々な慰霊行事が執り行われていますが、それぞれの連携はなく、それぞれが単独で行っているのが現状です。長岡空襲体験者の高齢化が進み、現存される重要な節目となる翌年に向けて何ができるのかを模索してきました。この一年で大きな成果は得られませんでした。行政との結び付きは今まで以上の関係が構築できましたし、ながおか平和フォーラムでは、長岡 JC がリレートークのコーディネーターを務めさせていただくなど、小さいながらも確かな一歩を踏み出すことができました。灯籠流しの事業の中で、学校現場にて平和学習を行ったことも、昨年の説明会以上に踏み込んだ内容となりましたし、清掃事業、灯籠流し本番でも小中学生にボランティア参加を多く募り、市民にとって身近なものとすることもできました。また灯籠の無料配布を行うことによって、今まで灯籠を流したことがない方から多くのご参加を得ることができました。慰霊行事を行う団体は、多種多様なため、一枚岩となることが非常に難しい状況であることは確かです。しかし、空襲を経験した我がまち、長岡だからこそ、より一層の取り組みと連携の模索は今後も継続していかなければなりません。次年度灯籠委員会でもぜひ前向きな取り組みを期待したいと思います。

担当例会では、灯籠流しに直結するといっても過言ではない、近現代史をテーマに取り組ませていただきました。難しいテーマであり、歴史が好きな人でも苦手とする分野であり、どのように分かりやすく伝え、片寄せずに委員会の想いを乗せ、またメンバーの興味を引き出せるか、ということに注力しました。見せ方では裁判形式を取ることで右寄り、左寄りの意見をぶつけ合うことで、見ている方が納得できるように工夫しました。またどちら側の意見にも頷けるような設えにさせていただきました。結果として、例会後は様々な懇親会の席で議論を生み、目指した形を実現することができました。長岡 JC メンバーだけでなく、現代人は歴史を不勉強すぎです。これは個人の責任でしょうか。国の責任でしょうか。このような状況を作っているものはなんなののでしょうか。そこに切り込むことができた例会であったと委員会メンバー一同、自負しております。

また、灯籠委員会では京都会議、忘年会を設営させていただきました。忘年会は一年を締めくくる事業であり、卒業生にとっては JC での最後の事業となり、大変重要なものです。本年度は背景、目的から「家族」というキーワードを抜き、誰のための忘年会なのか、そして何を目的とした忘年会なのかを明確にし、シンプルにしながらも深みのある忘年会を設営することができました。

私は会社では経営者という立場でありながら、自分の課題はリーダーシップの弱さであると感じており、委員会という組織をまとめ、引っ張っていくことは社業に繋がる重大な修練の場であると感じて活動を行ってきました。本年度の灯籠委員会をまとめ切れたと言える状況ではありませんが、このような経験をさせていただき、また他委員会の委員長像を横並びで観察させていただき、本当に勉強させていただくことができました。

またスタッフの皆様、理事の皆様から暖かいご指導を賜り、心より感謝申し上げます。そして何よりも委員会メンバーの皆様には心から感謝しております。リーダーらしからぬ委員長ではありましたが、支え合い、喜び合い、ともに活動できたことは私の一生の思い出です。私は幸せな委員長でした。本当にありがとうございました。